
黒猫と七ツ夜

John

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒猫と七ツ夜

【Nコード】

N8389X

【作者名】

John

【あらすじ】

ある日、少年は殺された

そして目が覚めると目の前には巨大な扉

少年が立ち上がると頭の中に声が響いた

『ようやくお目覚めかい？』

第一話 終わりと始まり（前書き）

初投稿

多少の不具合には目を瞑ってください

第一話 終わりと始まり

その男は血の海に佇んでいた

その真つ赤な海にはたくさんの人『だった』ものが浮かんでいる

その肉の塊はお父さん、お母さん、良くしてくれたおじさん、仲の良かった友達に似ていた

そんなことをぼんやりとした頭で考えていると、男が近づいてきた

「――七夜の忘れ形見か、隠れていればよかったものを」

そう男がつぶやいた瞬間、僕の意識は闇に落ちてゆく

そうして目が覚めると

――大きな扉の前にいた

立ち上がると頭に声が響く

『お目覚めかい?』 『七夜——君』

特に不審に思うこともなく返事をする

「こんにちは。あなたは誰ですか?」

『ハハッ』 『僕の声の聞いても不気味に思わないなんて』 『君は不思議な子だね』

よく意味がわからないな

『まあ』 『僕は君たちが言うところの』 『神様ってやつだよ』

神様が僕に何の用事だろう

『簡単に言うと』 『君を別世界に』 『送ろうと思ってね』

「なんでさ」

つい口に出してしまった

『君は』 『本当はあそこで死なないはずだったんだよ』

『それがちよつと』 『ミスしちゃってね』 『まあ』 『テンプレ乙
ってやつだよ』

「テンプレ?」

『そこは』 『あまり気にしないでいいよ』

なんとなく釈然としないな

『なんだかんだで』『転生する君に』『何かプレゼントを』『あげようと思ってね』

「プレゼント？」

『そう』『なんだって言うてごらん』『たいていのことは』『かなえてあげるよ』

そんなこと言われても特に浮かばないけど・・・

「転生って言うのは赤ちゃんから始めるんですか？」

『うん』『記憶を持ち越すだけで』『生まれ変わるといっていいね』

それなら・・・

「転生先での僕の苗字を『七夜』にしてくれませんか？」

『うん？』『それだけでいいの？』

「はい、充分です」

僕にとって『七夜』というのは僕に残っているあの人たちとの唯一のつながりだ

『オーケー』『それぐらい任せといてよ』『名前はどっしりようか』

そうだな・・・

「せっかくですし神様がつけてくれませんか？」

何かご利益がありそうだ。すると神様は少し驚いたような声を出すと

『アハハッ』『君は本当に面白いね』『いいぜ』『かつこいい名前を』『つけてやるよ』

『でも』『本当にそれだけでいいのかい？』『危険な世界かもしれないよ？』

「大丈夫ですよ、たぶん」

多少の危険なら七夜の体術で何とかなると思う

『わかったよ』『なら』『そろそろ転生させようと思うんだけど』『準備はいいかい？』

「ええ、持っていくものもありませんしね。お願いします」

そう答えると僕の体が透けてゆく。扉をくぐるわけじゃないのか

「お世話になりました神様、お仕事がんばってください」

『うん』『君も第二の人生』『がんばってね』

そうして僕の体は消えていった

- ??? ? SIDE -

『本当に』『面白い子だったな』

彼が消えていった後につぶやく

『あつ』『名前考えてあげなきゃ』

少し考えるがなかなか難しい。だが・・・

『よし』『決まった』『彼の名前は・・・』

『楔』『七夜 楔だ』

『気に入らなくても恨まないでね』『楔ちゃん』

『君が僕なんか頼むからだよ』『だから』『僕は悪くない』

大抵の事は叶えてやるとは言ったけどね

『がんばれよ』『楔ちゃん』『でもあの世界じゃ』『本当に死んじゃうかもなあ』

『そうだ』 『彼の元々の才能を』 『少し後押ししてあげよう』

ピンチに急に強くなるとか、嫌いじゃないぜ

『そうと決まれば』 『さくつと終わらせようか』

そついうと僕は鼻歌を歌いながらその場を後にした

- SIDE OUT -

第一話 終わりと始まり（後書き）

お疲れ様でした

かなりの亀更新になると思いますができれば次回も・・・
止めてっ！石投げないで！！

第二話 別れと出会い（前書き）

設定だけ固めようと急遽投稿しました
あまり長くはありませんがどうぞ見てやってくださいます

第二話 別れと出会い

そんなこんなで俺が転生し十七年の月日が過ぎたとさ

ん？一人称と口調がだいぶ違う？

十数年も経てばそりゃ多少の変化はあると思うが…

まあそんなことはどうでもいい

俺はあれから前世と文化は一緒だが名前が違う、『ジパング』という国に転生したらしい

らしいというのは神様の計らいかどうかは知らないが、俺が前世と同じ…

『七夜』と呼ばれる暗殺集団に生まれたからだ

ずいぶんと規則が厳かで外交、仕事をする大人以外ほとんど外界に出ることはない

俺も仕事で一回出たことがあるぐらいだ

そんな場所で俺は七夜の体術を学んでいる

これまた神様の計らいかの俺の肉体は七夜の体術にとっても適しているらしく、

とある致命的な『欠陥』がなければ七夜の体術をすべてマスターし

た最強の

暗殺者…いや、『殺人鬼』が出来上がっていたことだろう

そんな誰に向けたかもわからないモノローグを展開していると…

「どうしたんだ？楔」

俺を呼びだした七夜の長にして我が敬愛なる父上に声をかけられたこの人も前世と同じ顔、人格をしている。ここまでくると不気味だ

「なんでもありません、長」

俺が畏まった返事をしていると他の呼び出された人たちも集まってくる

俺も自分の立ち位置に戻ると父さんが皆に声をかける

「今日、諸君らに集まってもらったのは他でもない。七夜の今後についてだ」

今後？仕事のほうは順調だと聞いていたが…一族全員を集めてするような話なんか？

「今日を持って七夜は『解散』となる」

！？なんだと

「いったいなぜですかっ！！」

友人の一人が声を上げる。当然だ息子である俺にも訳がわからない

「安心しろ、戸籍などは準備してある。これから一人一人に指示を…」

違う、そんなことを聞いているんじゃない

「なぜ七夜が『解散』なのかを聞いているんですッ!!」

俺も声を荒げる。父親に対してこんな怒鳴り声を上げたのは初めてだ

「…簡単なことだ楔、七夜はこれ以上暗殺稼業を続けられない」

…確かに七夜の一族の肉体が弱体化しているといっているというのは聞いている。それでも…

「まだ俺たちの世代があるじゃないですか!!」

そう俺が叫ぶと俺の同世代の友人たちが顔を俯かせる。まさか…

「そうだ楔、お前はその才能と『欠陥』ゆえ別に訓練を受けていたから知らなかった

ろうがな。暗殺稼業をしていけないのはお前たちの世代からなのだよ…」

そんな…俺が呆然としていると大人たちは知っていたらしく他に反対者はいない

すでに一人一人指示を受けていた。そして最後に

「楔、お前が最後だ」

長…いや父さんが俺を呼ぶ

「はい…」

俺はおぼつかない足取りで父さんの下に歩いてゆく

「楔…お前はおそらく普通の社会では生きていけない」

当然だ。俺は七夜の極死まで木偶の坊相手だがマスターしている

そんな人間が普通社会で生きていけるはずがない

「しかし暗殺者としてもやってって行けまい。そこでだ…」

どうしろって言うんだ？『欠陥』でも克服しろとも言っのだからか

「お前には外国に渡り…『掃除人^{スワイパー}』として生きてもらっ

はっ？

そうして今俺はよく知らん国の空港にいる

日本で『七夜』を名乗るのは危険だからと国外に送り出すために、数ヶ国語を五ヵ月程度で覚えさせられた

神様のくれた頭脳がなければ不可能だっだろう

というより『七夜』以外の姓を名乗るんじゃ駄目だったのか？

そんなことを考えていると、父さんが

「こいつにお前のことは頼んでおいた」

と押し付けてきた写真とらふてに写った男がこちらに近づいてくる

「お前が——の息子でいいのか？」

と手に持った写真と見比べている

「はい、そうだと思います」

そんな返事しかできなかった。あんまり人と話さないからなあ

「よしきた、これからお前の面倒を見ることになる『スヴェン』
ボルフィード』だ」

そう眼帯の男は名乗った。父さんも相手の名前ぐらい教えておいてほしい

「七夜…いえ、『ミソギ』ナナヤ』ですこれからよろしくお願い

します
」

そうして俺の掃除^{スワイパー}人生活は始まった

第二話 別れと出会い（後書き）

お疲れさまでした

楔君の立ち位置だけハッキリさせようとスヴェンと合流させました
楔という名も今後何らかの意味を持つことになります
では、次回も見てやってくださいませ

設定（前書き）

設定です

まだほとんど書くことないですけど

ネタばれも含まれますので注意してください

設定

ミソギ「ナナヤ（七夜 楔）」

17歳

見た目はまるつきり七夜 志貴

性格は飄々としているが結構熱くなりやすい

神様に才能にブーストをかけられているので肉体、頭脳共に天才的
当初作者は志貴の転移物語を書くつもりだったが扱いきれず断念
結果志貴に似たオリ主になった

名前が楔になった理由はそのうち明かされる

暗殺術を得意とするが殺人ができないという暗殺者にあるまじき『
欠陥』を抱える

神様

歳、外見共に不明

しゃべり方がまさにあの人

主人公の名付け親となる

詳しいことはその内作中で明かされるかもしれない

設定（後書き）

オリキャラ（一人ぐらいは出るかな？）や新しい設定が出る度に
随時更新していきます

第三話？ 技術と欠陥（前書き）

「お待たせしました。どうぞご覧ください」

神「『ずいぶん』『待たせた割には』『1000字程度しか』『ないんだね』」

「うぐっ、今回は3000字ほど行く予定なので勘弁してください」

神「『なら次は』『今回の三倍』『かけるって』『ことかい？』」

「うわああああん」

第三話？ 技術と欠陥

「…はい、ではあちらで褒賞金が支払われます」

「まいどあり。いくぞ、ミソギ」

「あつ、すぐに行きます」

俺が掃除人免許証を受け取っているとスヴェンさんに呼ばれた

スーパーライセンス

「っち、たった80万イエンか。思った通り小物だったな」

「まあいいじゃないですか。ようやくまともな飯にありつけますし」

そんな話をしながら建物の外に出る。すると…

「おつ、いくらになったんだ？ミソギ」

面白い服を着た人にそう聞かれる

「たった80万だったけど久しぶりにまともな飯にありつけそうだよ、トレイン」

「よっしゃ、早速食いに行こうぜ」

彼の名前は『トレイン』ハートネット『凄腕のスーパー』だ

スヴェンさんの相棒で世間知らずな俺に色々なことを教えてくれる

最初は敬語で話しかけていたが「気持ち悪い」とのことです普通に話すようになった

「待て待て二人とも。久しぶりの収入だぞ？半分は当面の生活費として…」

スヴェンさんが口を挟む。そりゃ当然か、たまには腹いっぱい食べたかったが…

「いいじゃんか全部使おうぜ」

そんなことをトレインが言うので…

「そうですね、金は天下の回り物といいますし」

ついつい便乗してしまった

「うつしゃー！食いまくるぞミソギ！！」

「ああ！！久しぶりの飯だっ！！」

そんなやり取りをしているとスヴェンさんが呆れた様子で

「お前らみたいなのがいるから回るんだよ」

「それとミソギ、お前はトレインに毒されすぎだ」

そんなことないと思うんだけどなあ…

そんなこんなで俺たちは食事中だ

三人仲良く同じパスタを食べている。大皿で頼んだほうが安いからだそうだ

そこで次の目的地について話をしていると…

「「「「「!?!?!?!」」」」」

5人ほどの男が押し入ってきたかと思うと「「「ぎゃあああああ」」」
「…銃乱射しやがった

無論、俺たちは物陰に隠れている

「やっぱ平和ってのは唐突に崩れるもんだね」

「まっただ」

俺がこの二人と行動を共にし始めてそこまで長くないがこういったことも少くない

「ボスはあるたの能力を高く買ってたんだ。戻ってくるつもりはねえのかい？」

「い…いやだ…！私は決めたんだ…私は…」

眼鏡のおっさんが銃を持った男たちに囲まれている。そういえばあのおっさん…

「トレイン、あのおっさん…」

「ああ、わかってる。確か二百万ほどだ…たしかハリー…ただけか？」

そう、あの男は半月前に失踪したリブファミリーの幹部『ハリー・アフレック』だ

「なっ、本当か？」

「俺たちの記憶力は知ってるだろ？スヴェン。ちよっくら行ってくるぜ」

そう言つてトレインは煙幕（スヴェンさんの発明品だ）を使い見事おっさんを拉致

俺たちは素早く店外に脱出させていただいた

「なははは、スヴェンの発明もたまには役に立つな…！」

「何言つてやがる、俺の発明品はいつだって完璧だろうが…！」

おいおい後ろのおっさん啞然としてるぞ。幹部って面じゃないよ、あんた

そうしてほとぼりが冷めるまで一時身を潜めることになった

第三話？ 技術と欠陥（後書き）

お疲れ様でした

次回はさらに時間かかるかも知れませぬがどうぞ見てやってくださいませ

第三話？ 技術と欠陥（前書き）

「ヒヤッハー投稿だあ！！」

神「『おや？』『意外と』『早かった』『じゃない』」

「いや、書きだめるつもりだったんだけど我慢できず……」

神「『まあ』『ずいぶん』『あっさりしてるけどね』」

「もしかしたら編集ぐらいはするかもね」

神「『それでは』『ユツクリシテイツテネ』」

第三話？ 技術と欠陥

「君たちは一体…なぜ私を助けてくれたんだ？」

おっさんがそんなことを聞いてくる。何か勘違いなさっているようだ

「誤解すんなヨおっさん、俺たちは掃除屋だよ」

「おっ、あつたぞ『ハリー』アフレック』捕獲の褒賞金200万
イエーン間違いないな」

「そういうことです、だから感謝される覚えはありませんよ」

ここで抵抗でもしてくれればトレインが喜びそうなものだが…

「それでも助けられたことには変わらない。ありがとう」

「…なんか毒気ねえな」

…やっぱマフィアの幹部って柄じゃないよなあこのおっさん。会計
士あたりだったんだろう

「で？おじさんはなぜ組織を脱走したんですか？」

「組織のために人生を費やしている自分に嫌気がさしたんだ」

「過去を切り捨てて新しい人生を行きたかった…」

やっぱ根は悪い人じゃないんだな。するとトレインが

「…お気楽だね、過去を切り捨てることなんてできやしねエん
ぜ」

「そいつがそいつである限りな…」

…トレインの過去、か…

「今日改めて実感させられたよ、だから…精算ぐらいはしないと
な…」

「なにか…俺たちに頼みたいことがあるんじゃないですか？」

そこまではつきり覚えているわけじゃないが…この人には奥さんと
娘さんがいたはずだ

「…！その通りだ。警察に行く前に一目でいい妻と娘に合わせて
はもらえないだろうか」

ピンゴ！まあなんとなく予想はできるよな

「…あ？」「なんだってエ？」

「いまさら都合が良すぎるのはわかっている…関係を絶つてもう
七年も経っている」

「しかし、せめて一言…謝りたいんだ…」

スヴェンさんは少し考えるそぶりをした後

「悪いが俺たちは正義の味方じゃねエ、獲物の望みw」わかった
っ!!」っておい!!」

トレインが口を挟むここは俺も…

「いいじゃないですかスヴェンさん、彼女たちの家ここから近い
みたいですし」

「ああ、ロジャーナという隣の田舎町だ」

「ねっ、スヴェンさん」

「『ねっ』じゃねえええお前が焚きつけたんだろっがミソギ!
」!

「もちろん俺もそんなボランティア活動する気なんてありません
よ」

しかしロジャーナには『あれ』がある。行かないわけにもいくまい

「でもロジャーナには『あれ』があるんですよ…なっトレイン?」

「その通りだミソギ、やっぱお前も目エつけてたか」

「その『あれ』ってのはいったいなんだ?」

そう、『あれ』といえば…

「「名物土産『ネギまんじゅう』です！！（だっ！！）」

「二人ともそれが目的かッ」

やべっ、スヴェンさんすごい「ずくん」としてる

・スヴェンSIDE・

「ったく、お前らの気まぐれにはいつも手を焼かされるな」

「なんだよスヴェンまだ怒ってんの？」

そんな訳ねエだろうが、しかしミソギのやつもすっかりトレインに毒されやがって

「土産が食いてえ、本当にそれだけの理由か？」

「当たり前だろ？ミソギのやつは知らねエけどな」

「…組織のために半生を費やした男…あのオッさんに自分の影でも見たんじゃねえか」

「もつとも…お前の抱えてる『闇』はあのオッさんの比じゃねエがな……」

こいつの…^{イレイザー}抹殺者としての過去はな

「…よしてくれよ。ジョーダンじゃねエ…」

「あれ、二人とも何の話をしてたんですか？」

席をはずしてた襖のやつが戻ってきた。そろそろ休むとしますかね

- SIDE OUT -

「今、スヴェンさんが車取りに行ってますから」

「…ほんとうにいいのかい？」

「ハハッ、いまさら止めるなんていったらスヴェンさんに怒られますよ」

ネギまんじゅう食べ損ねるし

ちなみにトレインは腹が減ったといって食べ物を買に行った

「ありがとう…感謝するよ…」

「どういたしまして」

？誰か来るトレインじゃないしあれは…

「…やられたぜ…ドジっちゃまった…」

スヴェンさん！？違うあれは…

「う…撃たれたのか！？早く手当てしないと…！」

「違うおじさん！！近づいちゃだめだっ…！」

——次の瞬間おっさんの体は四発の鉛玉に貫かれていた

「そんな…しっかりしてくれおじさん…！」

息も絶え絶えなおっさんは懷から一枚の写真を取り出している

「…大きくなった娘に…一目でいい…会いたかった…よ…」

そうつぶやいて、涙を流しながら息を引き取った…

「…安らかに眠れ」

セリフとは裏腹に目の前の男は楽しそうにつぶやく。こいつ…

「任務・完・了」

そう言つて屋根に飛び乗り視界から消えうせる。

俺は感情に任せて男を追つていった

「まさか追ってくるとはねえ…」

「意外かい？『レイスッドノバン』」

確かりブファミリーのそれなりに有名な銃使い《ガンマン》だ

「ほう、私の名前を…なぜ彼に肩入れしたか聞いてもいいかな？」

「俺は掃除人だからね、賞金がほしかった」

「それはすまないことをしたな…仕返しに来たのかい？」

…あながち間違っていないか

「ただの八つ当たりだよ、覚悟はいいかい？」

「ハッハッハ、できるものなら…やって見せるオオオオ！！」

ずいぶんと沸点の低いことだ。いきなり銃を乱射してくる…無駄だけれどな

俺は素早く懷から愛用のナイフを取り出す…出掛けに父さんがくれた業物だ

オリハルコンとか言う金属でできているらしく恐ろしく丈夫で切れ味がいい

それで向かってくる弾丸を叩き落しながら接近し相手の懷に潜り込む

「なっ!？」

今頃気づいたのか…話にならないな

「閃鞘・八点衝…」

ナイフで全身を切り刻んで顔面を蹴り飛ばした

だがどれも致命傷にはならない、できない

「ぐぎゃっ、ばっ、馬鹿なッ!！」

そうして馬乗りになりナイフを突き立てる…

——ことはできなかった

「くそ、この『欠陥品』め…」

こんなに頭に来てても『殺せない』って言うのか

「まったく自慢の体術も形無しだな」

そうばやいていると気配を感じた。この感じは…

「自分のことを『欠陥品』なんて呼ぶんじねエよ」

「トレイン…」

予想通り後ろに『トレイン』ハートネット』が立っていた。

「後は俺がやとく。お前はスヴェンと合流してろ」

「…すまない」

熱くなって行動するもんじゃないな…情けないところを見せてしまった

さっさと退散しようとその場に背を向ける。すると…

「ミソギ」

「ん？どうしたんだ？」

急に呼び止められた。どうしたんだろう？

「お前は『欠陥品』なんかじゃない」

「…！ありがとう、トレイン」

本当にいいやつだよ、こいつは

改めて背中を向け飛び上がると背後から銃声が一つ、響いてきた

こうしてこの事件は幕を閉じることになる

今はネギまんじゅうを食べながら次の目的地に向かっている途中だ
おっさんの家族には玄関に写真を置いておいた。それぐらいしかで
きることはないだろう

「どうしたんだミソギ？ボケーンとして」

「ああちよつと考え事を…ってトレイン！！ネギまんじゅう全部
食いやがったな！！」

「お前がボーっとしてるからだ。残念だったな」

「うるさい！！俺、まだ一個しか食べてなかったんだぞ！？吐き
出せ！！」

「二人とも暴れんじゃねエ！！やかましい！！」

…父さん俺、この二人とならうまくやっていけそうだよ

「おいスヴェン、車止めろ！あそこの店つまそうだぞ！！」

「ふざけんな！！今回のただ働きのせいでほとんど金なんざねえぞ！！」

食事には困ることになりそうですが…

第三話？ 技術と欠陥（後書き）

お疲れ様でした

やっぱり括弧の使い方下手だな、いやにあっさりしてるし

少しずつでも確実にL V U Pしていくつもりなので

見捨てず見てやってくださいませ

第四話 過去と仲間（前書き）

「はいっ、投稿です」

神「『早いと』『思ったら』『また』『短いね』」

「今回は説明回だからね。仕方ないね」

神「『そのワリには』『また』『あっさり』『塩味だね』」

「うわあああああああああん」

第四話 過去と仲間

「俺から逃げようなんざ100万年光年(?)はえエーゼ!!」

「おいトレイン、わざとだよな?」

俺たちは今食い逃げ犯を追いかけている途中だ

逃げた瞬間追いかけてきたので俺たちも食い逃げ犯と同罪なんだがね

まあ、捕まえれば許してくれるだろう

「はっ、はっ、しつこいやつらだな…」

いや、ここまで長時間逃げ続けるってかなりすごいと思うよ?

まあ、もう少してこの鬼ごっこも終わりだ

「!?!」「なっ!」

しかし食い逃げ犯は突然現れた男にナイフを投げつけられ仰向けに倒れてしまう

「…こんな小物相手に何を遊んでいられるのですか?トレインさん」

小物相手なら殺さなくても…いや、わずかに息があるみたいだ

ん?トレインさん?

「！！…クレヴァー」

「なんだトレイン…知り合いか？」

あつ、スヴェンさん何時の間に来たんだろう。待ちきれず食い逃げ犯になったか

「ああ…飼い猫時代の後輩みたいなもんだな」

飼い猫時代？

「二人ともワリーけど外してもらえるか？」

「わかった、二人でこいつを病院に連れてつとくよ。急げば間に合いそうだ」

「…頼む」

そうして俺はスヴェンさんと食い逃げ犯を病院に連れて行った

でも俺には聞かなきゃならないことある。トレインは教えてくれな
いだろうし

「スヴェンさん、飼い猫時代って…」

「…そうだな、あいつも教えないだろうし一応教えといてやるか」

隠してるモンでもないしな。そうスヴェンさんはつぶやいた

「ならまず『クロノス』については知ってるな？」

「はい、聞きかじった程度ですが…」

たしか世界経済の1/3を裏で牛耳る巨大組織だ

「なら話は早い。トレインはその失踪した抹殺者だイレイザー

「2年前に失踪した時の番人の？クロノ・ナンバーズXIIIIですか」

「…！！まああの入れ墨をみればすぐにそこまでたどり着くか」

『時の番人』とはクロノスが抱える抹殺者たちの精鋭たちのことだ
彼らは体のどこかにそれぞれナンバーを入れ墨しているらしく、ト
レインには『？XIIII』の入れ墨が存在する

そして何よりトレインの愛銃『ハーデイス』はナンバーズの武器と
しても裏では有名だ

「まあ、俺もその程度しか知らん。悪いが後は…」

「いいですよ別に、ここまで知れば充分です。ありがとうござ
いました」

そつ、自分の考えに確信が持てただけで充分だ

これ以上は本人に聞くべきだろう、聞く気はないが

会話が途絶えて二、三分経ったときトレインがこちらに歩いてきた

「あいつはどうしたんだ？トレイン」

「…行っ たよ」

「そうか…」

きつと…殺したんだろうな

「おつ、そーだあの食い逃げ犯は何とか一命を取り留めたぜ」

「そういえばそうだった。報酬も手に入ったし何か食いに行こう」

まあ、だからどうしたって感じなんだけどな。里にいたところから周りは殺人者だらけだったし

人間の本質なんてもっと別のところにあるもんだ

「マジかッ！！なら俺高級海鮮料理のフルコースがいいな」

「調子にのんなッ！！」

人がかつこよくモノローグ展開してるのにこいつは…

第四話 過去と仲間（後書き）

お疲れ様でした

トレインの過去についてとこの世界の詳しいことが出てくる回なんですが…

また随分とあっさりしてしまいました

ぶっちゃけ必要最低限のことしか説明してません

この先重要になると思いますのでできれば記憶しておいてください

それでは次回もまた見てやってくださいませ

第五話 盗賊と七ツ夜（前書き）

さて諸君、投稿を始めるぞ

神「『何やつてるのさ？』」

そこは乗って欲しかったな…

神「『くだらないこと』『言っていない』『始めるよ』『』」

それではゆっくりしていつてくださいます

第五話 盗賊と七ツ夜

「にしても久しぶりだねえ。全然連絡がないから三人ともくたばっちゃったかと思ったよ」

俺たちは今『ケット・シー』というカフェにいる…って毎回似たような入りだな

「そう簡単にくたばりやしねエよ」

「むしろ餓死で死ぬかと思いました」

絶食生活はさすがにキツかった…

「つらい立場にいるってのに気楽だねえあんたたちは」

この人は『アネット』ピアス』元掃除人で今は情報屋を営んでいる

「まあ、慣れてますしね」

そんな話をしていると女が店内に飛び込んできた、また面倒そうな臭いが…

その女は俺の脇を通り過ぎトレインに飛びつきこっぴどく叫ぶ

「助けてください!!」

「ヤダッ!!」

俺ってそんな頼りなさそうに見えるかな…ってトレイン？

「なっ、なぜ!？」

「これからおにぎりを食うからだ」

ああ、そうだこいつはこういう奴だった…まあ、ほんとに見捨てるなんて真似しないだろうけど

「なら俺が行ってくるよ。外にいる怖いおにーさんたちを追い払えばいいんですよ？」

そっ、外からおつかない顔した男たちが四人ほど睨んできているのだ

「えっ、ええそうだけど…」

「よし、じゃあちよつと言って来るよ。スヴェンさんその人のことよろしく願います」

スヴェンさんならこれだけで理解してくれるだろ、たぶん

そう言って外に出ると男たちに囲まれる。あれ？思ったほど怖くない…

「店の前で騒がれると迷惑なんでお引取り願えませんか？」

「へっ、地元チーム『アイアン・メイデン』の最強メンバーに向かって馬鹿な野郎だぜ」

ああ、やっぱりもう少しマイルドに言っただろうがよかったかな？い

や待て

「おまえらむっさい顔して『鉄の処女』アイアン・メイデンってどうなんだ？」

「…ッ！おいお前ら！！まずはこいつから始末するぞ」

…ああやっぱり気にしてたのね

「はあ…骨折ぐらいいは覚悟してくれよ？」

そう言つて一人に掌底をぶつけてあげた。コブシは慣れてないから仕方ない

「なっ、なんだこいつ！？」

そう言いながら発砲してくる。安物なのかいやに弾速がのろい

それらを避けながらまた一人に手刀をいれ気絶させる

「こっ、こいつ弾がみえてんのか！？」

むしろ見えないのかよ、お前。最強が聞いて呆れる

そいつの頭を踏み台に木に登る…あれ？今ので気絶したみたいだ…
嘘だろ？

少し動揺しつつも残りの一人に声をかける

「お前で最後みたいだな？」

できるだけおつかない声を出して威圧してみた

「あつ、ああああああああああ」

叫びながら銃を乱射、俺も木から飛び降りながら構えて…

「悪いね」

そう言つて飛び蹴りを浴びせた。ようやく終わったよ…

すると店内から三人が出てくる。うまくやってくれたみたいだな

「どういうことか説明してくれますよね、オネーサン？」

「…気に入ったよ、アナタたち」

うわあ、悪い人の顔だよこれ…

「で？あんだ誰よ」

さすがトレイン臆することなく突っ込んでいく

「『リンスレット』ウォーカー』盗賊なの。ご存じない？」

あらま、結構な有名人だったようだ

「なんだ知ってんのか？ミソギ」

「本当に興味のことはすぐに忘れるのな、お前」

頭いいのにもつたいない

「リンスレット＝ウォーカーといや有名な泥棒請負人だ」

「泥棒請負人だア？」

スヴェンさんが俺に代わって説明してくれる。俺あまり説明得意じゃないしね

「各国の政府やマフィアにもリンスのお世話になってる奴は多い。重要機密なんかを盗み取るためにな」

「犯罪者でも国がお世話になってるから賞金もかけられない」

しかも成功率はかなり高いことで有名だ

トレインに説明し終えたところでリンスが話しかけてきた

「さっきのチンピラはあなたたちを試してみようと思ってけしかけたのよ」

そう言いながらかつらを外す。いや、いくらなんでも力不足だろ

「試した理由はアナたちに力を借りたかったから。結果は予想以上ね」

あれ？もしかしてあいつらマジで強い部類に入ってたの！？

「ブラックキャット本当は黒猫とその相棒ともかく…そこの学生さんもたいしたものだわ」

「当たり前つてもんだ。こいつは格闘戦なら俺よかよっぽど上だぜ？」

なにそれこわい。さすがに天下の黒猫にはかなわないだろ

それよりもトレインの正体が知った上で協力を求めるとは…

「まあ、異形のことを相手取る七夜の技は伊達じゃないってことね」

…！！まさかそこまで調べ上げているとはね

確かに七夜は『人ならざるもの』の始末を請け負う退魔の一族だった

しかし今では異形のものなんて存在しない

そこで食べていくのに困った先人たちが始めたのがついこの間まで続いていた『暗殺稼業』だ

「まあ、そんなことはどうでもいいでしょう？」

父さんのひとつ前の世代までの話だ。俺にはほとんど関係ない

「それもそうね、それでこれが協力してもらいたい内容なんだけど…」

そう言つて懷から一枚の写真を取り出す

「あなたたちの次の獲物…こいつにしてみる気はない？」

…また物騒な相手を。確かに協力も欲しくなるだろう

「『闇の商人』トルネオⅡルドマンねえ」

「ソニア大陸で力を伸ばしてる武器密輸組織の頭目か」

報酬は5000万イエン。しばらくは遊んで暮らせる金額だ

「…私の狙いは彼の進めてるとある実験データ。でも彼の所在はわかってても進入は難しそうなよね」

そりゃそうだろう5000万イエンは伊達じゃない

「でもあなたたちと組めばそれも不可能じゃない」

「あなたが『知識』、俺たちが『実力』を提供すればってことですね」

「そう、これならお互いの目的を果たせるでしょ？」

随分とリスキーな内容ですけどね

「あなたたちの選択肢は二つ。私と組んで人生のギャンブルを試みるか…」

微笑みながら言葉を続ける

「…臆病風に吹かれて逃げ出すかよ」

そんな挑発を受けた後、俺たちは宿に戻ってきた

「俺は反対だぜ、あの女は信用できねエ」

そりゃそうだ。さすがにリスクすぎる上に味方が信用ならないんじゃないかな…

「…でも…このまま引き下がるワケにやいかねーだろ」

そう言っつてハーデイスを抜いて窓の近くに立つ。そして…

…遙か先にいた鳥型のロボットを打ち抜いた。

「なあ、二人とも。報酬も危険も超一級、引き下がる理由なんてないんだぜ？」

「…あの女は俺たちのこと舐めてたしな」

だからこそ…

「このまま引き下がったんじゃ黒猫の名に傷が付く…」

…本当にカツコイイなあ、こいつは

- リンスSIDE -

「うそ…あの鳥型望遠カメラに気づいたって言うの!？」

カメラは100m以上離れていたのに…

「これが…ブラックキャット黒猫の実力…」

そしてあの学生風の男…七夜の一族は人間離れした使い手で有名だ

黒猫のあの言葉もきつと事実なのだろう

「…面白いじゃない…」

本当に面白いわ…

「私が手駒にできなかった男はいないのよ!！」

「あんたたちも…利用するだけ利用してやるわ…!」

やる気がこみ上げてくる。こんな気分も久しぶりだ

「よし!!景気づけにシャワータイム!!」

- SIDE OUT -

- ??? ? S I D E -

「随分と嚴重な警備だな、トルネオさん」

部屋に入ってきた銀髪の男がそう言った

「ふふ…近頃は私を狙う掃除人や密偵が後を絶たないもので…」

いかにもな悪人顔の男『トルネオⅡルドマン』が返事をする

「それは大変だ、心中お察しするよ」

銀髪の男と共に入ってきた黒い長髪の男も続く

「いやいや、あなた方ほどではありませんよ。クロノスにまで追われるなど…私には考えられない」

「よしてくれたまえよトルネオ、クロノスにマークされているのは彼だけだ」

楽しそうに長髪の男が笑う

「キミはおそらく存在すら気づかれていないだろうね」

「そんな我々に協力しているトルネオもたいしたものだよ」

次は『闇の商人』が楽しそうに笑う

「くくく…私は思うのですよ、あなた方なら私が100億イエンも費やした『神の実験』を必ず生かすことができる…」

「この退屈な世界をぶち壊すことができるよね…！」

三人の男が不適に笑う

一人は何も知らずに、もう一人は狂氣的に

そして最後の長髪の男の笑みはとても楽しそうだった

- SIDE OUT -

第五話 盗賊と七ツ夜（後書き）

お疲れ様でした

原作を知っていればわかると思いますが、オリキャラ登場です

やっぱり楔君にもライバルが欲しかったのよね

それでは次回も見てやってくださいませ

第六話？ 黒衣と少女（前書き）

お待たせしました！！

神『随分と長いね』」

うん、書きだめ尽きちゃったよ

神「『でも』 なんか読むのだるくなりそうだよね』」

そこなんだよな…分けたほうが良かったかな？

神「『まあ』 あんまりきりよく分けられなかったからいいんじゃない？』」

仕方ないか…

少し長めですがどうぞ見てやってください

ついでに七夜の退魔衝動が原作と多少違うのでご注意ください

第六話？ 黒衣と少女

「敵情偵察う！？何考えてんのよあんなたち！！」

リンスさんが怒鳴る。そりゃ怒るよね バレたりしたら大変だ

現在トレインは敵地偵察、俺&スヴェンさんとリンスさんの三人で話をしている

「大丈夫だよリンスさん、そんなに心配しなくても。あいつは黒猫ですよ？」

トレインが見つかるなんてヘマ…しないよなあ？

「私はトルネオを甘く見るなって言ってるの…」

「そんなにヤバイ相手なんですか？ソイツ」

「ヤバイも何もあいつはただの武器商人じゃない屋敷の地下に研究所を作ってとんでもないモンを…」

「えっ？」「あつ…」

ヤバッて顔してるなあ、美人だけど本当にプロなのかな？

「…そーいやお前の狙いは奴の研究データとか言ってたよな」

「…そうよ」

「協力しようって言うんなら俺たちにも教えてくれないんじやないですか？」

「トルネオの研究って奴の内容を…」

そう言っただけで聞くとリンスさんは観念したように言った

「いいわ、教えてあげる。奴の研究っていうのはね…『人を超えた人』の研究」

「人を超えた…人？」

「そう、奴の研究はナノマシンによって究極の『バイオウエボン生体兵器を生み出すこと…」

数分後俺は街中を歩いていた

リンスさんと別れてスヴェンさんは宿に、俺は甘いものが食べたくなっただけで彷徨っている

すると道の隅から怒鳴り声が聞こえてきた

「…おいガキ！人にぶつかっておいてあいさつもナシかア！？」

うわあ、いい大人が子供に絡んでるよ。いやな世の中だ

見捨てたら後味が悪そうなのでとりあえず助けてあげよう

「どうしたコラッ！親呼んで慰謝料請求すんぞ！？」

「へえ、請求してもらおうじゃないか」

そう言つて後ろから肩をつかむ

「ただ持ち合わせがなくてね…代わりに七夜流暗殺術をただで教えてあげようか」

少しづつ声にドスをつけていく

「なんだ、テム「教わるんなら死を覚悟してもらいますよ…？」…結構です…」

そう言つて男は逃げていった。そこまで怯えられるとなんとなくシヨックだ

「っと、大丈夫か？お譲ちゃん」

そう言つて女の子の顔を見た瞬間…

——血が昂ぶる

ドクン…

——鼓動が速度を上げていく

ドクン…

今まで感じたことの無いほどの興奮

——これはソンザイシテハイケナイモノダ

ドクン…

——ヒトトイウソソソザイカラハミ

デテイル

ドクン…

ダカラコロシテ…

「わたし…おになの…」

「ッ!!」

なんだ今のは!?!今ではスツカリ静まっているけど…

七夜の人殺しの血が騒いだ?ありえないだろ流石に

でもこの娘今、鬼って言ったか?本当だったら今の血の昂ぶりにも七夜の退魔衝動だという説明が…

いや違うみたいだ。姿は人間だし、混血って雰囲気でもない

だいたい化け物退治の世代じゃない俺が見ただけで興奮するなんてありえない話だ

ということとは…俺は小学生ぐらいの女の子を見て興奮した変態か…？

いやいやいやもつとありえないありえちゃいけない

とっ、とりあえずこの娘をどうにかしなければ…

たぶん鬼って言うのは鬼ごっこのことだろう。つまりは…

「じゃあ鬼ごっこしてるときにあのおじさんとぶつかっちゃったんだ」

「うん…でもみうしなっちゃったの…」

そりゃそうだ。こんな小さな子供が鬼なワケがない

「よし、ならとりあえずおうちに帰ろうか。きっとそこでお友達も待ってるよ」

そついうとその娘は急にキョロキョロしだした

「ん？どうしたの？」

「…ど…ど…」

まさかの迷子でしたか…

とりあえず近くの公園のベンチに座らせた

「はい、これ」

そう言つてアイス差し出した。アイス嫌いな子供はいないだろう

「これ…たべものなの…？」

「えっ、アイス…食べたこと無いの？」

そつたずねると首を縦に振った

アイスを食べたことが無いって…珍しい子だな

俺みたいに世間と隔離されていたならともかく友達と鬼ごっこで遊ぶような子供が…？

「つめたい…」

少し考え事しているとそんな感想をこぼしてきた

「でも…おいしい…」

うん、可愛い娘だな…って嘘だろ？俺マジでロリコンなのか？

いや、きっと違う今の可愛い妹なんかに対する可愛いだ

クソッ、なんか俺のキャラが崩壊してきた…って

「どうしたの？そんなにキョロキョロして」

「知らないヒトがいっぱいいたから…」

えっ？そんなの当たり前じゃあ…

「わたしあまりおうちからでたコトなかったから」

ああなるほど、アイスを知らない理由にも合点がいった

鬼ごっこをしていたのも初対面で仲間に入れてもらっただろう

子供の社交性の高さはなかなか馬鹿にできないからな

「まちにこんなにいっぱいヒトがいるなんてしらなかった」

「ああ、とてもよくわかるよその気持ち」

俺も初めて里の外に出たときは驚いたもんだ

「でももつと外に出てみるとこんなものじゃないんだよ」

「そうなの？」

「ああ、もつと大都市に行ったりすれば景色がみんな人で埋まっちゃうんだ」

「ほんと？」

「うん、ビスタシティで開かれるイモ祭りなんて身動きが取れなくなる」

うん、あれはひどかった

「機会があつたら行つてみるといいよ。ただし大人と一緒にね？」

うわぁ、凄いキラキラした目でこっちを見てるよ。どうせなら笑つて欲しい

「じゃあ、アイスも食べたしそろそろ行こうか」

「…どうするの？」

「うん、めんどくさいけどやっぱり警察に頼ろうか」

「けいさつ？」

「うん、きつとすぐにお迎えが来るよ」

「おじさまがいった…けいさつはてきだつて…」

「おじさま？」

あれ？もしかしてマフィアのお子さんか何かですか？

少し冷や汗をかいていると目の前の車からとんでもない人物が出てきた

「トルネオ！？なぜこんなところに……」

トレインがなにかやらかしたのか！？

しかし向こうは側近との会話に夢中でこちらに気づいていない……やれる……！

「ツツ……！なんだこいつは……！」

二人の側近が驚愕の声を上げたが手刀いれると睡魔に適わなかったのか地面に伏せてしまった

「なッ、なんだ貴様は……！」

トルネオが叫ぶ。ここはかつこよく決めてみよう

「ただの掃除人だよ」

そう言っただけ勝利を確信した俺は……

さっきまで一緒にいた女の子に串刺しにされていた

「……しかし下手だね、どうも」

一人で先走ってこの結果か…情けない

意識が朦朧とする中顔を上げると…

「……………」

人を刺しといて…泣く奴があるか…

「すぐに…助けに行ってやる…」

「…!!」

よし、トルネオは俺が死んだと思い気づいていない

やっとの気持ちでそう伝えたと俺の意識は闇に落ちて言った…

- トレインSIDE -

「ちょっと…そりゃマズイよ。いきなり今夜屋敷に乗り込むってえ…!!?」

リンスが驚いた様子で尋ねてくる

「あんた本気で言ってるの?」

「もちろん！小細工ナシの正面突破で奴を捕まえる！」

いや…その前に一発ブン殴るか

「あのね、仲間がやられて頭にきてんのはわかるけど…もっとしつかり手はずを整えてからでも…」

そう説得してくるリンスを俺は壁に押し付けた

「…なによ…」

「俺はな…」

「『ダチ』がやられてはい、そーですかと冷静に事を運べるほど器用じゃねーんだよ…」

そつ、あいつ二人目の『相棒』であり俺に初めてできた『ダチ』に手エ出しやがったんだ

しつかりと『不吉』を送りつけてやる…

- SIDE OUT -

目が覚めると宿のベッドの上にいた

どうやら道端で倒れていたのを運ばれたようだ

俺の傍に居てくれていたスヴェンさんによると俺を刺した少女はイブという名の…

トルネオの『生体兵器』らしい

まさか七夜の退魔衝動がナノマシンにまで反応するなんてな…

俺があゝの衝動に襲われたのも、七夜の体術に適した体を持っていたからだと考えればあまり不思議は無い

七夜の体術は元々化け物退治用のものなのだから、それに適していたのなら当然というものだろう

その他にもスヴェンさんに詳しい話を聞いているとトレインとリンスさんが入ってきた

「ミソギ！！目が覚めたか！！」

「ああどうにかって…その小包はなにさ」

「弾薬を仕入れてきたんだよ。今夜乗り込むことにしたんでな」

「…！」

「お前はここで休んでろよ俺たちであのデブは…」「俺も行く！」
…何？」

俺はあいつを…イブを助けなきゃならない

「約束したんだ…助けるって…」

「なに言ってるのよ！その傷じゃあ…」

リンスさんが引きとめようとするがトレインに遮られる

「…一体なにがあった？」

「…悪い」

そういうとトレインは納得した様子で…

「そうかい…でも俺もお前を連れて行くつもりは無いぜ？」

「…！！」

「せつかく一命を取り留めたダチを死に追いやるようなマネは認めんだよ」

「トレイン、俺は…」

「引かねエってか。オマエも意外と頑固だからな」

そう言っつてトレインは腰からハーデイスを抜きと…

「じゃっ、一つこいつに決めてもらうか？」

弾を一つこめ俺に投げ渡してきた

「どうしろって言うんだ？俺の頭でロシアンルーレットでもすればいいのか？」

「いいや、オマエの頭じゃない…そいつで俺の右手を撃ちな」

…なるほどね。なかなかいやらしい事を要求する

「本気なのか…？」

「ああ、本気さ。これぐらいの覚悟も無い奴を連れて行くわけに
やいかねエ……！！」

今の俺は明らかに足手まといだからな。多少傷の治りは早いが…

ハーデイスはリボルバー式で装弾数は全部で六発

1 / 6の確立でトレインの右手を打ち抜くことになる計算だ。でも
な…

「わかったよ…」

引く訳には行かない…

そうしてトレインの右手の甲に銃口を突きつけ…

カン、カン、カン、カン、カン

…五回引き金を引いた…何でリボルバーで連射なんかできたかだっ
て？

それでも暗殺者の一族、得意じゃないが銃だって使える。早撃ちぐ
らいお手の物だ

といつてももちろんトレインみたいに規格外なわけじゃない

命中精度もスヴェンさん以下だろう

トンファーなんかも得意だがやっぱりナイフや刀みたいな刃物が一番しっくりくるみたいだ

「これで満足か？」

そう笑いながらトレインに話しかける

「まったくためらわずに、しかも五回も引き金を引きやがるとはな……」

「特に何回引けって指定されなかったからな。怒ったか？」

「いいんや、それでこそ俺のダチだよ……」

そう言つて笑いあっているとスヴェンさんが痺れを切らして話しかけてきた

嫉妬でもしたんだろうか？

「で？どうすんだよ二人とも」

「決まってるじゃないですかスヴェンさん」

「ブチ抜くさ……トルネオとイブの所までな……！！」

待
っ
て
ろ
よ
い
づ
…
!!
!

第六話？ 黒衣と少女（後書き）

お疲れ様でした

次はそこまで長くないと思いますが多少詰まっているので遅くなる
かもしれません

1週間以内には投下する予定なのでどうぞよろしくお願いします

第六話？ 黒衣と少女（前書き）

お待たせしました！ようやく投稿でございます

神「『今回は』『随分書き直したんだね』」

オリジナルの場面はつらいですわ…

他の作者さん方本当に凄いと思う

神「『まあ』『頑張って精進しようよ！』」

もちろん！これからも頑張っていきますよ

それではどうぞご覧ください

第六話？ 黒衣と少女

「スヴェン、今回は『右目』は使わないのか？」

「『右目』は使わん…こいつで十分だ」

そう言つてスヴェンさんはオートマチックの拳銃を見せてくる。頼もしいな

「ミソギはなんか持つてきたのか？」

「一応投げナイフを持つてきた。怪我もあるしあんまり弾幕には飛び込みたくないからね」

回収が手間だけど、拳銃よりは使い慣れている

「よっしゃ、それじゃあパーティータイムといきますか！」

そう言つてトレインは爆弾を投げつけ門を爆破した…つて

「スヴェンさん…火薬多すぎじゃありません？」

「知らん、トレインが改良したんだろ」

「そういうなよお二人さん、花火は派手なほうがいいだろ？」

そうかもしれんが凄い勢いでガードマンが集まってきたぞ…

それじゃあさつさと進入することにしますか

「ぐあああああ！！」

「後から後からキリがねエなア」

「おいお前ら、ちゃんと急所は外してんだろうな？」

「もちろんですよ、殺したら報酬が減っちゃいますから」

そう返事をしながら「グツ！？」：蹲っている男の足からナイフを抜き取る

「大体俺が殺せるわけ無いでしょう？」

「…わかってるよ、慣れない武器で手元が狂っていないか心配なだけだ」

いや、俺は里に居たときにいやと言っただけ使ってるんだが…

そんなことを考えていると敵の増援が発砲してくる

「本当に数が多いなッ！！」

「ミソギ！ここは俺たちで十分だ、先に行きな！！」

「…！！」

「…ガキに伝えたいことがあるんだろ？」

「すまない、二人ともここは頼んだ！！」

そう言つて二人に背を向け駆け出す

イブ…あの子は俺を刺したときに確かに泣いていた…

生体兵器だろうがなんだろうが望んでやってるわけじゃないに違いない

現にイブが急所を外してくれたから俺はまだ生きてるんだ…！！

これ以上泣かせてたまるか…絶対に助け出してやる…！！

…迷つた

こんなに似たような風景ばかり続いてるとはね

せめて地図ぐらい見てくるんだつたな…

少しあせりながら走っていると中庭に出た

駄目だ、いるとしたら一番奥だ「ふん、死にぞこないが…」…う

ううん？

「まさかこんなところに居るとはね。奥に隠れてるもんだと思ったのに」

「ネズミ相手に隠れる必要もあるまい？こちらには猫どころか虎がいるというのに」

そう言つて横に居るイブを引きよせる。そんなに可愛い虎がいてたまるか

「まあ、どうでもいいさ。俺の目的はイブを助けることだからね」

「…何を言い出すかと思えば。イブは私の研究成果であり所有物だぞ？」

…何を言っているんだろうか？こいつは

「助け出すなどといわれてもなあ、それはただの略奪というんだ」

…ああ、なるほどようやくこいつの言いたいことがわかった

「なるほどね、オマエにとってイブはお人形さんなわけだ」

「ようやく理解したか。なら…「黙れよ」…！？」

少し頭に血が昇ってきたみたいだ。ただでさえイブに刺されて足りないのに

「そろそろその醜悪な顔にも飽きてきたところだ。舞台から退場

してもらおうか？」

「なにを戯言を…イブ！！奴を殺せッ！！」

そう言つてイブの肩を掴もうしたのでその手に向けてナイフを投げつける

「ガッ…！！貴様…」

「黙れつて言つたのが聞こえなかったのか？」

醜く顔を歪めて…地獄の門番も門前払いしそうだ

「大体だな…オマエみたいな奴にイブを縛る権利なんかあるわけないだろ？」

所有物だ？戯言もほどほどにしろ

「その娘は人形なんかじゃない。自由に、好きに生きる権利を持つているんだ…」

一人前に涙を流せるような子が人形なはずがない

「その『自由』をオマエみたいな下種にどうこうできる道理なんてどこにもないんだよ…！」

「…そのジユウっていうのはよくわからないけど…」

イブが初めて口を開く

「イブ、こんな奴の話w「黙ってる」「グッ…！」」

一睨みするとあっさり引き下がる。オマエの出番はもう終わりだよ。後は俺たちの食費にでもなってくれ

「わたしのすきなようにしていいの…？」

「…もちろん」

「…もう、ひとをころさなくていいのかな…？」

「当然だよ。なんなら血判でも押して見せようか」

そう返すと少し微笑みながら…声を上げる

「ならわたし…『ジユウ』がいい…！」

よしどうにか上手く纏まりそうだ…「ふざけるなっ…！」…はあ

声を上げながらイブにもう片方の手を伸ばすが一つの銃声と共に風穴を開けられる

「あんたの負けだよチェックメイトだ」

「おっ、おのれ…」

屋根からトレインが銃を構えていた…いいとこ持ってたなトレイン

「ミソギ、オマエ悪党相手だと口調全然違うよな」

「どっから沸いてきたですか？二人とも」

後ろからスヴェンさんに声をかけられる…口調はあんまり意識してないんだけどな…

トレインはトルネオとお話しているみたいだ。協力者について聞いてるみたいだ

「悪いな、実はかなり最初からいたんだが出るタイミングを逃しちゃった」

…トレインも一応空気を呼んでくれていたのね

なんとなく気が抜けてしまい壁に寄りかかろうとすると突然銃声が鳴り響く…って

「トレイン！！何してんだ！！」

トレインがトルネオを壁に押し付け首を絞めていた

「言え…あいつは今どこに居る…！？」

アイツ…トルネオを死にまうぞ！？

「スヴェンさん！！」

「クッ…！」

「言わなければ…」「ドガッ！！」「ガッ…！！」

「落ち着けトレイン！！お前らしくねエぞ！！」

スヴェンさんに殴り飛ばされる…大丈夫なのか！？

「ここでトルネオを殺したら何にもなんねエじゃねエかッ！！」

「…わかつてる…わかつてるよッ！！」

一応冷静にはなったみたいだ…あの感じからして過去繋がりが？

「わっ、わしは…あの男…『クリード』の所在は知らん…こちらからは一切連絡が取れんのだ…」

…だれだ？クリードって

「…お前とあいつの関係は？」

「定期的にナノマシンのデータを提供していたんだ…目的は一切知らん…」

トレインが悔しそうに顔を歪める

「トレイン『クリード』ってのは一体…」

トレインに声をかけた瞬間突然トルネオの屋敷が爆発した

「あの方角は…地下研究所！？まさか…「そのまさかよ、トルネオさん」…！！！！」

建物の角からリンスさんが姿を現す

「あなたの研究、全部灰にさせてもらったわ…施設もろともね」

「全部…灰…!？」

あつ、なんか真っ白になった。どれぐらい金かけてたんだろう

「…どういうことだよ、お前の目的はデータを盗み出すことじゃなかったのか？」

そっぴえばそつだ。一体どうしたんだろう？

「ええ、ホント…自分でもバカなことしたと思ってるわ…」

「でもね…気に入らなかったのよ…あいつの研究…」

イブの能力…『変身』《トランス》が作られるまでに…どんな実験が行われていたのか…想像は難しくないな…

「そんなことよりあんたたちはどうすんのよ。ケリは着いてるみたいだけど…トルネオ突き出すんでしょ？」

「そりゃもちろん。こつちも生活が…あつ…」

大変なことに気づいた。ヤバイ、まったく考えてなかった

「…ミソギ、そんなことしたら奴の研究成果であるイブは警察に保護されると思うんだが…」

その通りだ。下手をすれば解剖されて格好の資料にされかねない

イブがこちらを不思議そうな顔で見てくる…マズイマズイマズイ

「スツ、スヴェンさん…お願いが…」

「…わあつてるよ。イブを連れてきたいって言うんだろ…」

その通り。このままイブを連れて逃げ出してしまえばいいだけの話なのだが…

「でも賞金が…」「気にするなよ、そんなこと」「…すみません」

「そうそう、賞金逃すなんざいつものことだろ？」

二人はこう言ってくれるが…さすがに申し訳なさ過ぎる…

「ほら、さっさと行こうぜ？いい加減眠くなってきちゃった」

そう言つてトレインが歩き出す…悩んでも仕方ないか、とりあえず今は休みたい…

トルネオは研究所を見ながら眺めながらなにやらつぶやいている。逃げ出したりはしないだろう

こうしてこの事件は幕を閉じることとなる…

〓三日後〓

「で？これからイブの身のふりはどうするつもりなんだ？」

「…危険ですけど連れて行きたいと思っています」

「いいんじゃないか？足手まといにはならないだろうし。俺は反対しないぜ？」

やっぱり助けた手前、施設に預けるとか無責任なことはしたくないんだよな…

「お前らがそういうんなら俺も反対しねエよ…ただ…」

「わかってますよ。絶対に守ってみせます」

せつかく手に入れた自由だ。あの子の好きなようにはさせようと思ってるけど、危険なことにはやっぱり巻き込まないようにしたい

「まあ最後にはあの子が決めることですからね。勝手にこんな決心されても困りますよ、きっと」

そうすると人混みからリンスさんとイブが歩いてきた

「ヘエーなかなか似あってんじゃないブ」

「リンスさん、ありがとございました。わざわざ服まで選んでもらっちゃって」

リンスさんにはイブの服を選びに行ってもらっていた。イブの服装、黒い布一枚だったからな

「リンスでいいわよ。あんたみたいなのに敬語使われても背中がかゆくなるだけだわ」

「そう言われても…」「……」わかったよ、リンス」

睨みつけられたのでしぶしぶ口調を変える

トレインにも似たようなこと言われたし…俺の敬語って気色悪いのかな？

そんなくだらないことに悩んでいるとイブが話しかけてきた

「ねえ、ミソギ…わたしミソギたちについていきたい…こんどはわたしがミソギたちをたすけるの…」

「…それが自分で決めたことか？」

「うん、わたしがじぶんできめたこと」

一つの文に俺の名字が三回…なんか恐怖を感じるな…じゃなくて

「そっか…わかってると思うけど結構危険な仕事をしてるんだぞ？俺たち」

「だいじょうぶ、あしでまといにはならないよ。…ほらっ！」

得意げに指を刃物に変身させる…止めて周りの人達が啞然としてる

から

「それに…」 「ん？」

なにやら顔をニコニコしながら言葉を続ける

「いざとなったらまたミソギがたすけてくれるでしょ？」

「…ああ、任せてくれ」

頭を撫でながらそう返すとうれしそうに顔の筋肉を緩めてこちらに擦り寄ってきた

…初めてだな…何かをこんなに守りたいと思うのは…

俺はロリコンじゃないぞ！断じてッ！

第六話？ 黒衣と少女（後書き）

お疲れ様でした

今回は番外編…の前に新作を投稿するかもしれません

神「『…』 』どういつつもりだい？』 』一つでも苦勞してるっていうのに』」

そんなに怖い顔するなよ…

『BLACK CAT』って原作の長さ的に結構な長編になると思
うんだ

神「『だから』 』息抜き用に一つはじめてみようってワケ？』」

そういうこと。ただあくまで息抜きだからかなり更新は遅くなります

黒猫で詰まったら書く、といった形になりますがどうぞ見てやって
くださいませ

では次回もよろしく願います

第六話 番外 黒衣と少女（前書き）

待たせてすみません

神「『不定期更新とか言ってるくせにF a t eばっかり考えてたものね』」

つーかテスト期間なのがつらい…

たぶん500にも満たない量しかありませんがどうぞ見てやってください…

第六話 番外 黒衣と少女

- ??? ? SIDE -

「おつ、おい！貴様等、何の冗談だ！！」

「うう…手が止まらねええええ」

その直後、数回の銃声が鳴り響き『闇の商人』は舞台から降板することとなった

「トルネオさん…君の出番はもう終わりだよ…」

銀髪の男が言葉を続けた

「…しかしまさかこんなところでトレインの消息をつかめるとはねエ…」

「運命でも感じたのかい？クリード」

「そういう君こそ、このミソギ君とやらに随分とご執心のようじゃないか」

クツクツと笑いながら黒髪の男は答える

「当然だろう、この世界も退屈でつまらないものだと思いますガツカリしていたんだが…なかなか上物のようだからね」

「まったく、君の考えることは相変わらず理解できないね…ロア」

「それはお互い様だろう？ クリード」

そついうと二人は同時に笑い出す

それはとても歪で、楽しそうな笑いだった…

「精々楽しませてくれよ？ 転生者」

-
S
I
D
E

O
U
T

-

第六話 番外 黒衣と少女（後書き）

お疲れ様でした…という量もありませんでしたね

来週からテストなので再来週からはしっかりと更新させてもらいますので

次回もどうぞ見てやってくださいませ…

ちゃんと更新するからね！？お願いだから見捨てないで！！

第七話？ 転生者と七ツ夜（前書き）

久しぶりの投稿です

神「『待たせないようよう超特急で書き上げた上かなり短いよ』」

誤字は無いと思いますが表現なんか違和感を感じるかもしれません

神「『次話で上手く補完していくつもりだけどね』」

それではどうぞ

第七話？ 転生者と七ツ夜

「…すごい…ひとがいっぱい…！！」

「俺も初めて来たけど…凄い人混みだ…」

「姫様はともかく…ミソギまで興味津々だなあ、おい」

俺たちは今とある祭りを見に来ている

エルシダカーニバルといってスヴェンさん曰く動員数は毎年平均二万人を超えるそうだ

この人本当に博識だな

「ところでミソギ…おまえアジトで休んでなくて平気なのか？」

「ああ、傷跡は残ったけどあんまり無理しなきゃ平気だよ」

大体アジトで一人さびしくお留守番つても中々酷じゃないか？

…それにしてもさつきから…

「トレイン、どうやらお客さんみたいだぞ？」

「…そおらしいな…スヴェンたちはここで先にアジトに行つてくれ。すぐに行くからよ」

「そうさせてもらうよ。まだ本調子じゃないしね…っ」と

「……………」

よかった…イブはカーニバルのほうに夢中みたいだ

あんまり気負わしちゃ悪いからな

「それじゃ、行ってくるぜ」

「ああ、油断すんなよ」

さて、俺はもう少しカーニバルを見てからアジトに帰るとしますかね
その後トレインの走っていった方が爆発していたが…まあ心配ない
だろう

- トレインSIDE -

「今夜一時…エルシダ四番街にあるルナフォートタワーに来るが
いい…そこでクリードが待っている」

あれから俺は気の触れたような奴らに襲われた

クリードが俺をおびき出すために仕込んだようだが…

「それと必要ないと思うが言っておくぞ…お前の知っている女を
一人預かっている」

そう目の前の布で顔を隠したガキが言葉を続ける

ふざけやがって…俺が女を人質にしなきゃこないとも思っただのか！？

二年前…お前があいつにしたこと…忘れたとは言わせねエぞ…

「そしてもう一つ…これをお前たちの仲間の一人…ミソギという男に渡せ」

そう言つて一通の手紙を渡してきた

「…待て、アイツにいったい何の関係がある？」

ミソギの奴は少し前までジパングの森の中で暮らしていたんだ

クリードの奴と接触する機会なんか…

「クリードはあまり興味は無いみたいだが…同士の一人がぜひ会いたいそうだ」

「…俺がそんなもの正直に渡すと思うのか？」

「渡さなければ直接出向くだけだろうな。その際に残りの二人が無事で済むなどとは思うまい？」

……ちっ

あいつ一人なら大丈夫だろうが…あの二人は危険か

また面倒なもんに目を付けられたみたいだぞ？ミソギ…

- SIDE OUT -

「どこに行くつもりだ？こんな夜更けに」

「スヴェン…それにミソギまで…」

「までって…お前が呼んだんじゃないか」

部屋に来てって言われて行ってみりゃもぬけの殻とはどっいつ了見た

「そんなことより…会いに行くつもりだな？クリードって奴に…」

「えっ！？何でわかるんだテレパシー？」

「何でって…そんな昔の服を待ちだす用なんかそれぐらいだろ？」

初めて見たけど抹殺人時代の服だろ？それ

そう突っ込むと急に神妙な声を出した

「…俺はさア、一つだけ黒猫としてやっとなきゃならねエ仕事を残してんだ…」

「……………」

「俺は昔クリードに大切な女を殺された…」

…それぐらいだろうな、トレインがあんなに感情的になる理由なんか…

「今さらあいつを殺しても何にもならないのはわかってる」

それでも…

「でも…クリードとケリを付けなきゃ俺は本当に自由にはなれねエ…そう思う…」

そこまで言つと途端に口調をいつもの調子に戻した

「そんなワケだからさ、黙って行かせてくれよな」

「…トレイン…!」

スヴェンさんがトレインに向かって紙袋を投げつけた。あれは…

「昨日作ったばかりの特殊弾だ。テストも何もしてねエが役に立つかも知れねエ」

「アンタには世話かけるな…それとミソギ!俺の机の上に手紙があるそれを読んでくれ。処分はお前に任せるからよ」

「ん？ああ、わかった」

それがさっき呼んだ理由か？なんだってわざわざ手紙なんかで…

「それじゃあ行ってくるぜ。お前らも気を付けろよ…」

そう言い残してトレインは出て行った

その後俺もトレインの部屋にあった手紙を読み、すぐにアジトを飛び出す羽目になる…

・スヴェンSIDE・

トレインを見送りタバコを吸っているとミソギが慌しく走ってきた

「…？どうしたミソギ、トレインの手紙に変なことでも…」

「すみませんスヴェンさん！！ちょっと出かけてきます！！遅くなりそうなので先に休んでてください」

「なっ…おい待てミソギ！！…行っちまいがった」

ふと下を見ると手紙が床に落ちていた。よほど慌ててたのか落としたのに気づかなかったみたいだな

「こりゃ…アイツの手紙か？」

拾い上げつい中を覗いてしまう。そこには…

『黒猫が出て行った後、エルシダ郊外の森へ来い

来ない場合は貴様の大切な仲間^二に危害が及ぶこととなる

後悔しない選択をするがいい…

転生者よ^一』

…転生者？一体何のことだコレは

- SIDE OUT -

第七話？ 転生者と七ツ夜（後書き）

お疲れ様でした

神「『ようやく書きたかったところまで来たね』」

少し設定なんかが決まっていなくてもあるけどね

神「『まあ』『精々矛盾の出ないようがんばるんだね』」

第七話が全部終わったらFateのほうも更新する予定なのでよろしく願います

それでは次回もぜひ見てやってくださいませ

第七話？ 転生者と七ツ夜（前書き）

お待たせしました！ようやくの投稿です

神「『…何か言い訳は？』」

…物理死ね

氏ねじゃなくて死ね

第七話？ 転生者と七ツ夜

「どこだここ…」

俺は見事に道に迷っていた

まさかこんな罫があるとは…

大体エルシダ郊外の森ってなんだよ

ようやく見つけた地図見てみたら三つくらいあるじゃないか

「クソッ、この手紙の差出人絶対バカだろ!？」

とても学のある人間とは思えない。もしくはとんでもないうっかり者だ

まあたいした問題はなさそうだけどな

「そろそろ出てきてくれてもいいんじゃないか？俺の迎えに来たんだろ？」

「これは失礼、貴方の百面相が愉快でつい見入っちゃいました」

…悪趣味な奴だ。しかし銀髪の女ってのも初めて見る

かなり美人だしな

「アンタがあの手紙を？」

口調が手紙とかけ離れてるから違っただろうけど

「いえいえ私は送り主の分身みたいなものですよ。あのバカのために遥々パシリに来たわけです」

「そりゃ気の毒なことだ。それじゃあさっさと案内してくれないか？」

「貴方が聞いてきたのにこの扱い… ああわかりましたよそんなに睨まないでください」

睨んだつもりは無いんだけどな… 外見は美女でも明らかに人外の雰囲気醸し出してるからな、これ

「それでは逝きますよ… マッガーレ」

そう言っ指をパチンと鳴らす。すると…

「へえ… コレは凄いな…」

一瞬で森にたどり着いていた。テレポートか何かか？ いまの

「…おかしいですね… 私の造形だけでなくこの掛け声にも反応ナシとは…」

「ん？ 何か言ったか？」

「いえいえ何も。ほら私の本体が来たみたいですよ」

そう言つて女が暗闇を指差とそこから黒髪の男が現れた…というよりは生えてきた

「待たせてしまったな。私の分身が迷惑をかけなかったかね？ 楔君」

「こんな美人のお出迎えなら大歓迎だよ。人外で無ければ尚良かったが…どちらかというとアンタの手紙に苦勞させられた」

「…どういうことだ？ これは」

「どうもこうもありませんよ。私にもマッガールにも無反応でしたよ？ この方」

一体何の話をしているんだ？ こいつらは

「とりあえず私は眠らせてもらいますすね。話なら二人でしてください」

「好きにしろ。ただすぐに目覚められるようにはしておけ…転生者が相手ではどうなるかわからん」

「はいはいわかりましたよつと。それでは楔さんも頑張ってくださいね？」

そついい残すと女は地面に溶けていった…訳がわからん

「それで？ そろそろ俺を呼び出した目的を教えて欲しいんだが…」

「ん？ ああすまない、多少予想外だったのな。少し取り乱して

しまった…時に楔君、君は『月姫』という言葉に聞き覚えはあるかな？」

「…？いや、知らないな」

知らないが…イヤにしつくりとくる言葉だ

「…そうか…まあ君が何者であるかなど大した問題ではないか」

「…一つ聞き忘れていた。なぜ俺が転生者だと知っている？」

そこまで大した問題じゃないが…それなりに興味がある

「なぜとはな…本当に何も知らないようだな君は。いるはずの無い人間がいたら同業者としては真っ先に思い浮かぶ可能性だろうに」

「同業者…アンタも転生者ってことか。にしても俺がいないのが当然かのような物言をするんだな…まるで俺がいない世界を知っているかのようだ」

「…知っているさ。むしろ君が知らないことに驚きだ」

「…どういう意味だ？」

そんなもの神でもない限り知ることができるわけが無い

「簡単な話だ。楔君、君は世界というものがいくつ存在していると思う？」

「…無限に等しいと思うが…」

「私はその中の他の世界を観測できる世界から転生してきたというだけの話だ」

「それはまた途方の無い話だ。はいそうですかと信じる気にもなれないけどな」

「…大抵の転生者は他の世界を観測できる世界から来るのでな。君もその口だと思っていたのだが違ったようだ」

そうして小さなため息を付いた後ほそとつぶやき始めた

「…『直死の魔眼』、名前から『大嘘憑き』くらいは持っているだろうな」

「…？まあいい。それじゃあそろそろアンタの目的を教えてくださいませんか？」

「そうそうスッカリ忘れていたよ。私の目的だったかな？」

「そうだ、さっさと済ませてくれないか？俺もいい加減眠くなってきた」

気づけば結構な時間話し込んでしまっている

「そう急かすな…それでは…」

「！？」

一瞬で距離を詰めてくる。距離を取ろうとするが…

「死んでくれたまえ。楔君」

鎌のような刃物と化した男の腕が俺の胸を貫いた…

「ちっ、点は外したか…しかしその様子だと『大嘘憑き』は使えないようだな」

…何…を言っているんだ…？

まさかいきなりとは…直前の会話で油断していた…

「そのままというのも辛かろう、何すぐ楽にしてやる」

「何…で…」

「さつきから質問ばかりだな…まあいい、ただ君の異能力が欲しくてね」

ちから…？

「なに、私には『皆殺しの女王^{キラークイーン}』という死者からスキルを奪い取

る力がある。その標的に君が選ばれたただだよ」

そんな理由…納得できるか…！

「潔く行く者は、また速やかに逝く。安心して消えるがいい楔君。君の後釜は、この私が座ろう」

そついうと男の顔が歪んでいき俺と瓜二つになった

「この力…『無貌の者』^{フェイスレス}といつてね、顔だけでなく体格まで変えることができる。なかなか便利で気に入っているんだ」

そついうと服装まで俺と同じものになった

「とりあえずあのイブと言う少女を殺して『変身能力』^{トランス}を奪い取るのか…似たような力はもう持っているがあちらの方が応用が利きそつだ」

「なつ…！！」

「信じるものに裏切られた時の顔と言うのも中々見物だぞ？結構な回数繰り返してきたがあれだけは飽きないな」

ふざ…けるな…

あの子は俺が守るって決めたんだ…

俺の偽者なんかに殺させてたまるか…

「そう睨むなよ楔…そろそろ逝くか？」

（詭弁、かな。でも優しい嘘なら、それもいいと思います。たとえ偽善でも、何となく救いがありそうじゃないですか）

（さあ、殺しあいましょう兄さん）

（…はい、わたしも純粹に貴方に愛されたいです）

（——おかえりなさい）

ザザッ

ノイズの後に頭の中で何かが切り替わる

（さあ……生を謳歌しろ！）

（——ダメ。ここから先には行かせない。貴方は私と歸るのよ七夜。言うことをきかないのなら——）

（——フ。人になろうがその執着だけは捨てられないと見える。未練は捨てた。義理は果たした。後は、己であった証を残すのみ）

ザザッ

それは絶えることなく流れ込んでくる

俺はこんなのは知らない

俺はコレを知っている

頭が割れそうになる

目の前が真っ暗になる

頭の中で何かが切り替わる

意識が／反転／する

「…コレは驚いた…まさかその傷で立ち上がるとはね。なかなか生き汚いじゃないか」

「……………」

「…？どうした楔…っ！！」

傷だらけの楔が己の偽者に斬りかかる

「危ないな…へえ、いい目をするようになった。直死の魔眼にでも目覚めたか？」

男の問いかけに対して血を流している楔はブツブツと呟きだす

「こんなにも使い勝手のいい肉体を与えられていながら敗北したのか楔は…大体なぜあそこで距離を取ろうとする？」

「…！！貴様…何者だ？」

「それはアンタが一番良くわかってるんじゃないか？神様気取りの真似をしていたアンタなら…まあそんなことはどうでもいいか」

「まさか貴様は『本物』か！？そうか…神によって名を与えられると言っのはこういう事か…！！」

「…明察、中々に鋭いじゃないか。それじゃあそろそろ…」

「くっ、まさか貴様を相手取ることになるとはな…」七夜 志貴
「！」

「その首、俺が貰い受ける」

第七話？ 転生者と七ツ夜（後書き）

お疲れ様でした

神「『ようやくここまでできたね！』」

予想よりも随分長くなっただけだね

神「『神によって名前を与えられるという事…』 勘のいい人なら
もう予想はつくんじゃないかな？』」

次回も少しかかるかもしれませぬが

どうぞ見てやって下さいませ

オリジナル展開って予想以上に大変…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8389x/>

黒猫と七ツ夜

2011年12月3日20時57分発行